

県立高校「未来の学校」構築事業

研究開発最終報告書

実践校種別	学校名
高度な産業を推進する高校	木曾青峰 高等学校

1 実施期間

令和2年4月1日～令和7年3月31日

2 研究開発計画（令和元年度策定）の概要

(1) 構想名
新しい時代を切り拓く地域の未来を担う若手産業人育成に向けた、高校と地域のもつ資源との一体的で一貫した新たな教育プログラムの構築
(2) 研究開発の実施対象
令和2年度募集以降の全日制森林環境科・インテリア科の全学年
(3) 研究開発の目的と目標
①目的 (ア) 専門学科をより活性化することで地域産業の発展を図る。 (イ) 活力ある地域の再生とともに、県がめざすフォレストバレー構想を実現する若手産業人を育成する。
②目標 (ア) 高校での新たな学びに、林業大学校や上松技術専門校、自治体や森林組合、企業等と連携した実践的活動の他、地元への愛着を深め、自己の生き方をデザインし、木の新たな価値を見出す力を身につけるプログラム等を研究開発する。 (イ) 就職後は、コンソーシアム内で検討した地元複数企業での長期インターンシップを実施し、木に関わる広い業種で研修することで、より総合的な知識や考え方、技術、経験を身につける。 (ウ) 県林業大学校、上松技術専門校との連携を強め、林大グレードアップ構想を踏まえながら一貫カリキュラムの研究開発を推進する。
(4) 研究開発概要（目標を達成するための具体的取組や方策）
既存の教育課程に新たな学びを組み込み、地元の林業大学校、上松技術専門校や民間企業等と連携して実践的学習活動を行い、木に新たな価値を見出す力を身につける教育活動を探る。 【基礎・実践・提案プログラムの構築】 理数科・普通科・専門科の計4学科合同の哲学対話を含め、1年次に探究的学びの導入を行い、生徒の主体性を伸ばす基礎力を育成し、その後の実践・提案プログラムにつなげる。 【地域と連携した生徒の探究活動支援体制の構築】 地域コーディネーターと連携した探究活動を定着させ、生徒の学びの場を地域へ広げる。 【木曾青峰フォレストバレーコンソーシアムの構築】 本校専門科における実践的な学びにもとづいた産業人材の育成に向け、地元企業や自治体、林業大学校や技術専門校など、産官学の連携体制を整える。

3 最終年度の研究開発計画（令和元年度策定）における目標や目的の達成状況について

(1) 目的の達成状況

「専門学科の活性化ならびに、県がめざすフォレストバレー構想を実現する若手産業人の育成」という目的に対し、その達成状況を専門科生の進路動向（表1および図1）から考察する。

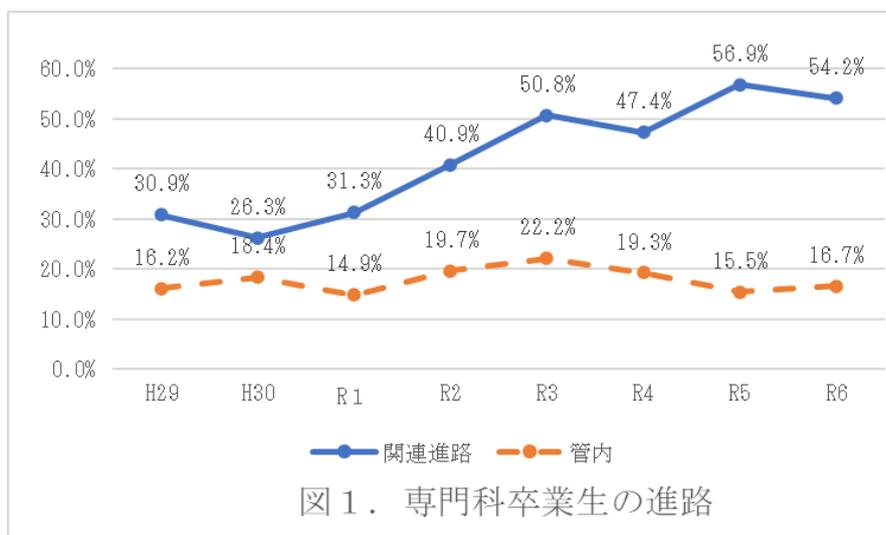
まず専門科の活性化に関して、生徒の確保では10区の高校入学予定者数が減少をはじめたR1

年以降、入学生の減少を抑えることはできなかった。しかしながら、本校他学科や同10区内の他校と比較すると、わずかではあるが減少幅を抑えている。背景として、未来の学校における探究的な学習活動内容をメディア等で発信したことで新たな学びに関心を持つ生徒が集まったと考える。本校ではR3年度より全学科で探究的な学びに取り組み、本年R6年度はR5年度より継続して4学科合同の研究発表会を実施するなど、専門科に限らず学校全体の活性化を目指す流れとなっている。

次に、「若手産業人材の育成」という目的に関しては、本事業開始年となるR2年度以降、専門科の学びに直接関連する進路を選択する卒業生が全体の半数以上となり（図1～4）、さらに年々その割合が増加していることから本事業の成果を実感している。一方、卒業直後に管内に就職または進学する卒業生の割合（図2）は、コロナ禍のR2～R3にかけ増加傾向に転じたが、コロナウイルス感染症が5類感染症移行後は、再び減少に転じている。

表1. 専門科卒業生の進路動向 (人)

		H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6	R7	R8
森林環境科	関連進路 対象/卒業数(%)	14 36.8%	16 40.0%	17 48.6%	17 54.8%	18 52.9%	17 53.1%	20 60.6%	14 60.9%		
	管内 対象/卒業数(%)	11 28.9%	9 22.5%	8 22.9%	9 29.0%	12 35.3%	9 28.1%	9 27.3%	7 30.4%		
	卒業生数	38	40	35	31	34	32	33	23	28(予定)	26(予定)
	インテリア科										
インテリア科	関連進路 対象/卒業数(%)	7 23.3%	4 11.1%	4 12.5%	10 28.6%	14 48.3%	10 40.0%	13 52.0%	12 48.0%		
	管内 対象/卒業数(%)	0 0.0%	5 13.9%	2 6.3%	4 11.4%	2 6.9%	2 8.0%	0 0.0%	1 4.0%		
	卒業生数	30	36	32	35	29	25	25	25	19(予定)	24(予定)



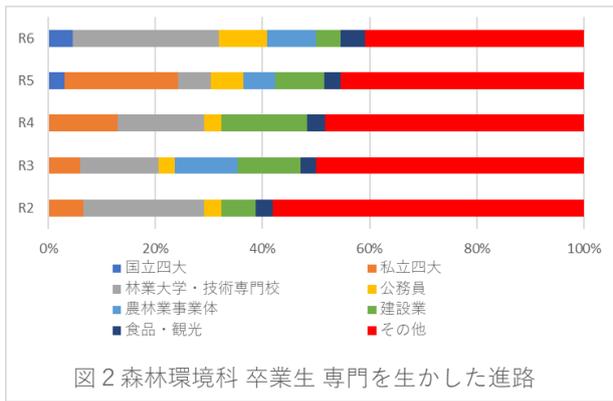


図2 森林環境科 卒業生 専門を生かした進路

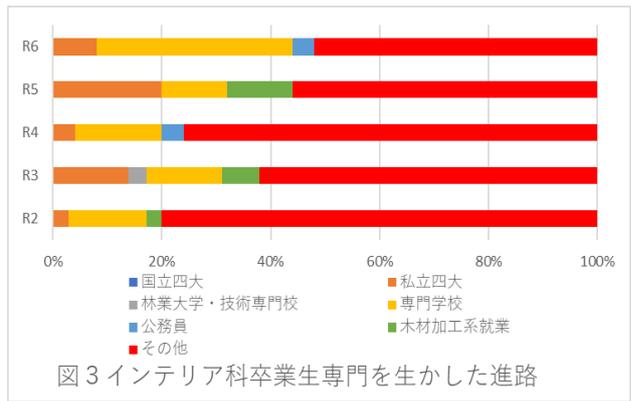


図3 インテリア科卒業生専門を生かした進路

木曽青峰高校 未来の学校 5年目

専門科3年生 本年度傾向

森林環境科		インテリア科	
国公立農学部森林科学科	1名	4年生大学建築学科	1名
林業大学校	4名	専門学校建築系	4名
技術専門学校	2名	専門学校デザイン系	5名
県職員林務課	1名	公務員(郡内)	1名
公務員(郡内)	1名		
林業事業体	2名		
JR東海	1名		
食品就職・進学	2名		
計	14名	計	11名

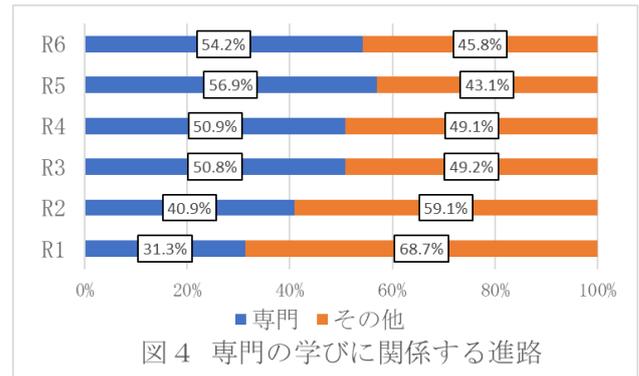


図4 専門の学びに関する進路

(2) 目標の達成状況

【地域と連携した実践的活動から地域資源の新たな価値を見出すプログラムの研究開発】

1年次基礎プログラムにおいて、地域コーディネーターや地元各種事業者・自治体との連携により、生徒の主体性を活かしながら地域とのつながりが構築できたと考える。特に木曽郡外生や寮生にとって、地域住民と接点を持ち、探究活動を通して地域に居場所が生まれることにより、学校という枠を飛び出し、地域の魅力や資源を発掘する自己探究に発展したことは想定を超える成果となった。

実践プログラムの構築を目指し、事業開始当初から地域の各種事業者との連携を模索し、企業視察や講座等を行った。新規の連携先や行事・授業時間との調整、本事業予算を基盤とする移動費や講師謝礼など、実施にむけ多様な対応が必要となり、一部持続性に課題が残った。一方、地元自治体、地域振興局(県)林務課、農業・農村支援センター、建設事務所等から提案いただいた事業や、林業士会、建設業協会、自動車整備協会等各種団体からの支援や提案のもと、年間を通し多業種の研修や講座など実践的学習が実施できたとともに、毎年恒例化し年間学習に位置付けられた持続性の高い連携体制も構築された。

提案プログラムでは、地域課題や資源を見出し、問題解決や活用に向けた研究活動とその結果の地域提案を目標とした。生徒のなかには、1年次の基礎プログラム(モノ・コトデザイン)をきっかけに、地域コーディネーターや住民とのつながりをいかして、2年次から探究活動に取り組み地域提案まで実行している個人やグループが生まれている。また、3年次課題研究において、生徒と地元内外の企業や事業者とが連携し、多岐にわたる商品開発や地域課題に取り組み、その成果が各種形態で地域に提案、還元されている。

【地域コンソーシアムを構築し長期インターンシップ等木に関わる広い業種での研修】

在校生、卒業生ともに、より総合的な知識や考え方、技術、経験を身につけることを目標に、県林業大学校、上松技術専門校との連携を強めた一貫カリキュラムの研究開発も検討された。R3年末に立ち上げ、R4年度より年2～3回実施されている木曾青峰高校産業人材の育成を支援する会（現「木曾青峰フォレストバレーコンソーシアム」）では、卒業生を含めた産業人材育成のあり方について検討する体制が整えられ、これはR7年も継続することが決定した。R6年度は、木曾谷・伊那谷フォレストバレーコンソーシアムが始動し、ICTを活用した林業技術の習得に向け、地元ドローン研修センターと提携し、将来的にドローン操作資格取得を目指す林大グレードアップ構想を踏まえた講座が本校で実施された。その他、県林務課の協力のもと本校職員に向けICTを用いた林業技術研修や現地見学研修も実現し、生徒の課題研究にも活かされた。

4 研究開発と学校全体の教育活動の改善・改革との関連づけ

生徒の主体性や多面的観点を広げる「哲学対話」は、基礎・実践・提案プログラムの開発で取り入れられ、R4年度から1学年全4科で取り組む探究学習の導入学習となった。これまで学習活動に関しては、全て学科単位で行われていた枠を超え、互いに学び合う姿勢が学校全体の教育活動に位置付けられたと考える。さらにR5年度より全4科合同研究発表会が実現し、初年度より地元中学生を招いて実施した。学科や高校（学校）の壁を取り除き、本校が開かれた学びの場に変わりつつある。

R4年度より、1年次基礎プログラムで行う生徒一人ひとりのマイプロジェクト「モノ・コトデザイン」の最終報告会会場を学校外の地域交流センターで実施している。招待者を学校外へ広げ、生徒と様々な経験を持つ地域住民との交流の場となった。その結果「高校生がまちへ降りてきてくれて嬉しい」と「高校生の直の声を聴く機会は大切」と前向きな感想を多数いただき、これまで地域住民が感じていた学校の壁も取り除くことができたと思う。

本研究開発にR3年から協力いただいていた地域コーディネーターや、講師、さらにモノ・コトデザインでご協力くださった地域の各種事業者の皆様の意欲的なご支援のもと、本校の未来の学校を地域で後継する流れが生まれている。R6年3月ならびに9月に「今後の木曾青峰高校の未来の学校を考える会」が有志住民の参加で実施され、本校の未来の学校へ今後も継続的に関わりたいという支援の声をいただくことができた。

木曾青峰高校フォレストバレーコンソーシアム（前身：木曾青峰高校の産業人材を育成する会）では、自治体や林業大学校・技術専門校、専門科関連事業体の皆様による、在校生・卒業生の継続的な研修機会について、本校の今後の全国募集をふまえ、全国に視野を広げた産業人材育成に向け、来年度以降の連携体制について確認されている。

5 研究開発で明らかになった課題及び改善方策

【課題】

(1) 地域と高校の隔たり

これまで、高校や高校生が地域とほとんどつながりを持っていなかったことが本研究開発で聞かれた生徒や地域住民の声から明らかになった。高校生の「地域に居場所がない」という声、住民の「高校生の直の声や考えを聞く機会がない」という声から、高校生と地域の関わりがなく、進路選択時に高校生に見える世界がとても狭いことが、地域産業への就業や最終定住への

障害となっていると考える。

(2) 学校教員と地域の隔たり

現在探究学習が全学科で取り込まれるなか、生徒のテーマが具体化した際に「木曾地域のなかでは誰に、どこにつなげていいかわからない」という教員の声が聴かれた。生徒は SNS で検索は可能であっても、そこには紹介されていない地元ならではの情報に出会いにくい環境となっている。教員の多くが郡外から通勤していることから、地域住民と関わり、情報を得る機会が限られており、本研究開発においては正確な地域情報を安全に生徒とつなげるためにも、仲介者となるコーディネーターの存在はとても重要であった。

【改善方策】

高校生が「自分の居場所が地域にない」と答える背景に、「大人の考え」を受け身で聞いて育った環境があると考え。幼少時代から、郷土や伝統の継承について学んできた生徒の言葉から、郷土愛を聞くことが多い一方で、人口減少傾向にあるのは「学び」が自分ごとになっていないことも一因だと考える。物理的な場所に限らず、自己の考えを受け止め、多面的な見方を持った大人と交流できる「居場所」を地域につくっていくことが改善の第一の方策と考える。

「哲学対話」の本質的な目的を理解したうえで、生徒一人ひとりの主体的な考えが尊重され、多面的な見方を広げる環境を確保することで、「探究学習」が定着し、新しい学びが深まる学校体制が構築されたと考える。

また本校は地域外から通勤する若年層の教員が多く、広い年齢層との交流や地元と関わる機会が限られる傾向にある。生徒と同様に地域や社会との隔たりが生じていることが懸念され、学校職員が広く地域住民と連携する機会やきっかけをつくることも方策としてあげられる。

6 次年度以降の成果普及の取組と自走計画

次年度以降も全学科で「探究学習」が行われる。1年次の全学科「哲学対話」、全校での4科合同研究発表会など、各科の探究学習の学びを共有し、交流する機会が来年度も確保されている。これまで、専門科の「未来の学校」にコーディネーターとしてご指導いただいた地域人材が、最終年からは普通科「探究」へも協力する体制となり、次年度以降の学科別の動きが全校体制へと発展していくことで成果普及につながると考える。

地域では、R6年3月ならびに9月に「今後の木曾青峰高校の未来の学校を考える会」が有志住民の参加で実施された。さらに同年に行われた長野県「人口減少対策を進めるための県民会議準備会合」をきっかけに、R7年1月に、本校の探究学習を支援する市民団体を立ち上げ、地域全体で本校教育を支援する体制について、地域コーディネーターや講師の皆様からご提案をいただいている。市民団体と企業（木曾青峰フォレストバレーコンソーシアム）が学校と連携し、組織的に本校の学びを支援する体制が確立されることで、地域で持続的に自走する取り組みへと発展したい。

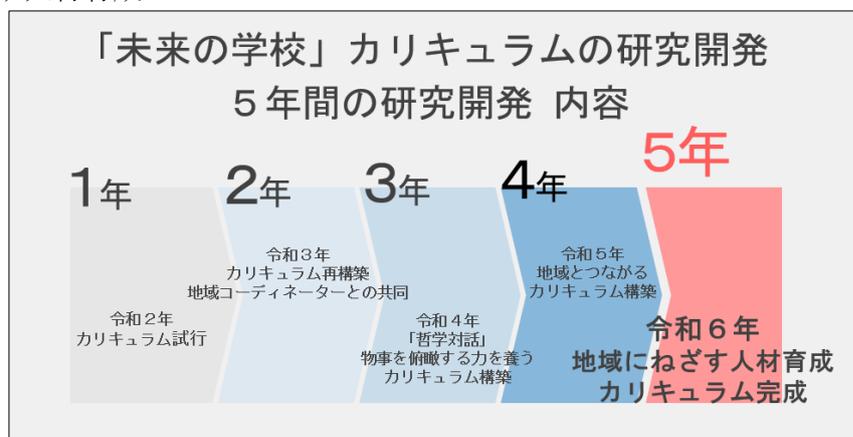
7 令和6年度（最終年度）の事業実施体制

(1) 令和6年度の研究開発の実績

① 取組の到達目標(又は仮説)、実施(活動)日程及び内容

【目標】

地域に根ざす人材育成



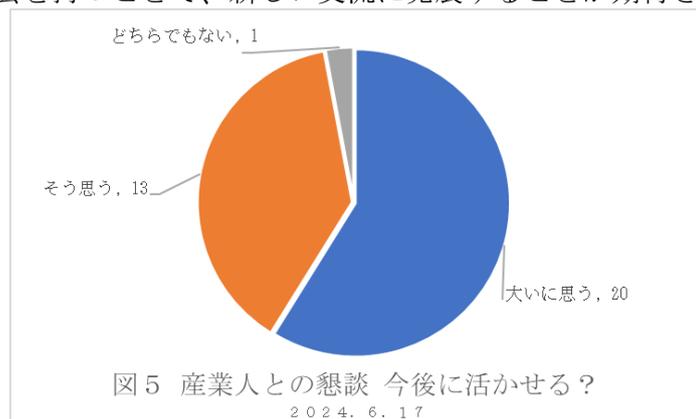
【実施(活動)日程及び内容】

- 4月 地域を知ろう・歩こう 学校周辺に居場所をみつける
- 5月 哲学対話 他者と出会い、自分を知る
- 6月 地域の産業人と出会う
- 9月 モノ・コトデザイン中間発表 地域懇談
- 10月 モノ・コトデザイン プロジェクト実行
- 1月 4科合同研究発表 他学科の探究活動にふれる
- 2月 モノ・コトデザイン地域報告会 中学生参加
- 3月 これからの未来の学校 地域人材との懇談

② 目標の進捗状況、成果、評価・検証

【生徒】

生徒の地域産業人との懇談会後のアンケートでは、今後活かせるという回答が多く、年間を通じて懇談機会を持つことで、新しい交流に発展することが期待された。



コーディネーターや地域産業人との出会いをきっかけに、自ら地域のコワーキングスペースや地元企業に足を運び探究活動を展開する流れが生まれた。特に寮生活を送る生徒たちにとって、こういった地域の公共スペースは大人と交流し多角的な視点を広げる重要な「居場所」となっている。



【地域連携】

未来の学校マイプロジェクト「モノ・コトデザイン」では、懇談会や中間発表などで、多くの地域の方にご来校いただき生徒にアドバイスをいただいている。最終報告会には 98 名の来場者を迎え、地域の関心の高さを実感している。参加者のアンケートから今後とも関わっていききたいという積極的なご意見をいただき、持続的な関りが持てる環境となっている。

現在、未来の学校の取り組みを継承し、生徒の地域での探究活動を支援する市民団体の立ち上げに向け準備が進んでいる。またこの5年間で、木曾青峰高校フォレストバレーコンソーシアムに参加される自治体、森林組合、長野県林業大学校、上松技術専門校など、多様な機関との授業連携が進められ実践的学びが深まっている。今後、市民団体、コンソーシアム、学校が組織的に連携し、木曾地域の住民主体の学びの場が学校を中心に広がることが期待される。

未来の学校報告会		来場者アンケート結果
【来場者：本日の感想】		
とても満足	15人	<ul style="list-style-type: none"> ・色々なジャンルの発表がありおもしろかった。(4人) ・想像があふれている。 ・一方的な発表ではなく、双方向の会話ができる形式だったのが◎ ・生徒が中心 ・それぞれの考えを自分の言葉で発表していた。 ・リアルな問題を解決したいという想いを感じられて良かったです。 ・それぞれの興味、好きなことが集まっているなと感じました。 ・絶対続けて欲しい、続けたい、関わりたい。 ・青峰高校の志をもつ人のコミュニティづくりなどあったらいいなと思った。 ・個人の興味関心に基づいた発表で、こちらまで、わくわくした。こんなに多くのジャンルの発表が聞けて楽しかったです。
満足	26	
ふつう	4	
少し不満	1	
不満	0	
満足:89%		

時期	有志参加・懇談会名	地域参加者数
3月	未来学校報告会	98名
3月	未来学校報告会 懇談会	5名
9月	未来の学校を考える会	14名
10月	モノコト・デザイン中間発表	14名
10月	木曾青峰高校フォレストバレーコンソーシアム	17名
1月	木曾青峰高校フォレストバレーコンソーシアム	15名

【校内】

校内では、R4 年度から全学科で探究学習が始まっており、R5 年からは全科合同の研究発表会が開催され、中学生も招待し、学びの共有が進められている。1 年次には同じく全学科合同の哲学対話を実施し、探究学習の導入としている。一方で、各科の取り組みが科単独で進められ、教員主導となり、地域連携や提案まで発展しにくい環境に関しては、本事業で展開した地域コーディネーターやフォレストバレーコンソーシアムとの連携を活かして、外部の視点や実業家の指導を導入していくことで、時代に即した探究活動に発展させたい。

③ 取組や成果の情報発信、普及に向けた取組

本校では、未来の学校報告会、4 科合同発表会、課題研究発表会など、複数の形態で生徒の学びを公開、発信している。未来の学校の取り組みについては、地元情報誌で特集を組んでいただくなど、地域にむけた情報発信が中心となっている。一方で、地域の魅力を発信するため独自に探究活動に取り組む生徒達により、YouTube 等生徒主体の情報発信の流れが生まれている。これらの取り組みは地域住民からも支援や協力を得て、地域活性化に向けて広く期待が寄せられている。

(2) 校内実施体制

カリキュラム・コーディネーター氏名 岩崎 史(森林環境科) 早川 聡史(インテリア科)

実施項目	担当責任者	実施時期、学年
①まち歩き	早川・岩崎	4月、専門科・普通科1年
②哲学対話	早川・岩崎	5月、全学科1年
③木曽青峰フォレストバレーコンソーシアム	教頭	10月・1月
④未来の学校最終報告会(職員研修)	岩崎	1月
⑤4科合同研究発表会	全科主任	1月、1・2年全学年、3年専門科
⑥専門科課題研究発表会	各科(岩崎・古畑)	1月、専門科全学年
⑦専門科展	各科(押鐘・横沢)	2月、専門科全学年
⑧未来の学校報告会	早川・岩崎	2月、専門科1年

(3) アドバイザー

氏名	所属・職	助言分野
大室 悦賀	長野県立大学大学院ソーシャル・イノベーション研究科 研究科長	研究開発に係わる指導・助言
瀧内 貫	一般社団法人ローカルイノベーションイニシアチブ 共同代表	研究開発に係わる指導・助言

(4) 連携コーディネーター

氏名	所属・職	支援内容
加藤 晋悟	加藤組代表取締役社長	コンソーシアム体制設備の助言・指導
坂下 佳奈	ふらっと木曽	学校と地域事業者を繋ぐ地域コーディネーター

(5) 実践校ごとの連絡会の実施実績

第1回	
実施日・時間	6月17日(月) 10:30~12:25
参加者氏名 (所属・役職)	瀧内 貫(一般社団法人ローカルイノベーションイニシアチブ共同代表)
協議内容	4月から現在までの状況、「未来の学校」の自走について
第2回	
実施日・時間	6月19日(水) 10:30~12:25
参加者氏名 (所属・役職)	大室 悦賀(長野県立大学大学院ソーシャル・イノベーション研究科研究科長)
協議内容	4月から現在までの状況、「未来の学校」の自走について
第3回	
実施日・時間	12月23日(月) 14:00~15:00
参加者氏名 (所属・役職)	坂下 佳奈(地域コーディネーター) 三木 舞子(学びの改革支援課 主任指導主事)
協議内容	本年度の活動および今後について
第4回	
実施日・時間	2月28日(金) 14:30~16:00
参加者氏名 (所属・役職)	瀧内 貫(一般社団法人ローカルイノベーションイニシアチブ共同代表) 坂下 佳奈(連携コーディネーター) 山下 卓郎(R. SENSES) 徳永 佳代(学びの改革支援課 主幹指導主事) 三木 舞子(学びの改革支援課 主任指導主事)
協議内容	5年間の総括と今後について

(6) 項目別実施時期・期間

	実施項目	実施日程（月）																
		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3					
1年 基礎 プログラム	未来の学校 オリエンテーション	○																
	木曽地域を知ろう 木曽町役場 町民課 移住定住係長 岩井航太氏 山と暮らそう 木曽町移住サポートセン ター木村 耕紀氏 普通科・森林環境科・インテリ科合同	○																
	木曽町を歩こう 「心動いた風景の写真を撮ろう」 山と暮らそう 木曽町移住サポートセン ター木村 耕紀氏 普通科・森林環境科・インテリア科合同	○																
	木曽町を歩こう 振り返り①		○															
	理数科・普通科・森林環境科・インテリ ア科合同哲学対話 長野県立大学 馬場智一教授「問いと質 問の違いについて」			○														
	木曽町を歩こう振り返り② 「哲学対話の手法を使い、心動いた写真 について話そう」			○														
	一般社団法人 木曾人 小林夏樹氏 「地域で活躍している産業人のプロジ ェクトを聞こう」 普通科・森林環境科・インテリ科合同			○														
	地域で活躍してる8人の産業人を 選ぼう ふらっと木曾 坂下佳奈氏、本校職員で 産業人リスト作成				○													
	デザイナー 高橋孝治氏による「プロ ジェクトを自分事して進めて行くには」 講演会				○													
	地域で活躍してる8人産業人とプロジ ェクトを考える				○													
	地域で活躍している8人の産業人の 方々のプロジェクトの振り返り。深掘り モノ・コトデザインプロジェクトの説明 夏休みのワンアクションについて				○													
	夏休みのワンアクション①					○												
	夏休みのワンアクション② ワンアクションまとめ ふらっと木曾 坂下佳奈氏 本校職員 の夏休みのワンアクション発表								○									
	地域懇談会 11名参加								○									
	モノ・コトデザインを考えよう① 「自分の好き興味関心からプロジェクトを 考えよう」									○								
	モノ・コトデザインを考えよう② 「自分の好き興味関心からプロジェクトを 考えよう」										○							
	モノ・コトデザインを考えよう③ 「自分の好き興味関心からプロジェクトを 考えよう」											○						
	モノ・コトデザイン中間発表に向けて① 「自分の好き興味関心からプロジェクトを 考えよう」												○					

